

♪ シニア便り ♪



第 5 号 (2004年12月発行)

発 行 北海道シニア吹奏楽団 事務局

編 集 『シニア便り』編集部

『絶対音感は本当に必要か』

トランペット 鈴木健一

「このところ、『絶対音感』という言葉がよく見かけます。情操教育の一つとして話題になっていますが、果たして絶対音感のあることが本当に有効なことなのでしょうか？ 本当に絶対音感がある人は、四四二kHzなのか四四〇kHzなのかという僅かな音程のズレも認識できます。スプーンの落ちる音、車の排気音、電車の音など、かなりの音を音程として認識できる人がいます。また、それだけではなく音程まで正確に把握できるようです。」

音楽では必ず和音がありますが、ピアノであれば平均律の和音、Cのコードであれば僅かに濁ったドミソの和音が出ます。吹奏楽では、管楽器と打楽器が中心です。その中で、管楽器は微妙な音程をコントロールできます。コントロールできるといふことは、平均律より正確な純正調の和音を奏でることができるのです。もちろん、絶対音感のある人も純正調を奏でられます。しかし、絶対音感のあるプレイヤーはどうしても平均律に近い演奏をします。ソロでは平均律は有効ですが、アンサンブルや吹奏楽などはむしろ純正調が重要なのです。つまり、絶対音感よりも相対音感（どんな音程にも柔軟に対応できる音感）の重要性が高いと思います。どこかの会社の「絶対音感」

というブランドに決して踊らされてはいけないと思います。

『シニアバンドと私』

ホルン 池内 美由紀

去る九月二十九日水曜日に入籍し、「池内」に苗字が変わりましたホルンパートの長瀬（旧姓）です。平成十三年にシニアバンドに入団して早いもので三年が経ちました。シニアバンドでは、改めて音を合わせる素晴らしさを教わり、また練習以外でも皆さんと飲みに行ったり、マラソン大会へ出場したりと楽しい時間を過ごさせていただきました。でも、まさかこのシニアバンドで将来を共に歩んでいく人と出会い結婚をして、そしてアメリカへ行って行ってしまうとは！ 自身全く予想していなかったことです。今は、勉さんと一緒に一月のアメリカ行きに向けて手続きや引越等で忙しい毎日を送っています。不慣れなせいで戸惑ってしまうこともたくさんありますが、二人で力を合わせて幸せな家庭を築いていきたいと思えますので、今後ともよろしく願います。

最後に、シニアバンドを紹介してくれた柿岡さん、私を娘のようにかわいがってくれた勘米良さん、音楽のことや演奏についていろいろ教えて下さった中村先生、入籍の際に私たちの証人になって暖かい言葉を下さった渡辺さんご夫妻、そしていつも楽しく仲良くしてくれたシニア

バンドの皆さん、本当にありがとうございました。

『マイベースな私ですが…』

ソプラノサクソ 菊田 貴子

シニアのほとんどの人が中学や高校、大学などで吹奏楽部に所属していた人だと思いますが、私は吹奏楽の経験がありません。楽器を始めたきっかけは、ただ何となく楽器でも始めてみようと思っていたとき「バービーボーイズ」というバンドの男性ボーカリストがソプラノサクソを吹いていたのを見て、「この楽器なら小柄な自分に合うのでは？」という単純な考えで、当時キクヤでバイトをしていた友人に頼んで楽器を買ってしまったのでした。その時は、スクールに通うつもりもなく適当な教本を買って独学でなんとかなるだろうぐらいにしか考えていなく、教本を見ながらリードをマウスピースに付け、なんとか音を出すことができましたのですが、それが「ド」の音なのか？……Bbって……何？……。

その後、楽器に触ることも無く一年ほどしてからキクヤのスクールに通うことになりました。そのキクヤのスクールの先生が林団長だったので、林先生にお会いしていただければ、今こうしてシニアバンドにいてもなく合奏の楽しさ、難しさを知ることなかったでしょう。バンドに入ってから今まで知らなかったことがいっぱい、あまりにも基本的な

ことなので恥ずかしくて書けません。シニアバンドの素晴らしいところは、私のような技術の無い者でもバンドに所属させてくれているところです。林先生の「合奏は吹かないのも技術のひとつ」という言葉に甘えてなかなか技術が進歩しない私ですが、細く長くこのバンドを続けていけたらと思っています。こんな私ですが、これからもよろしく願います。

『私の吹奏楽雑記帖』

副団長・常任指揮者 中村 暁生

(三) それは勘違いから始まった

昭和二十八年八月、音楽隊からの採用通知を受け取った私は期待と不安を胸に上野行きの鈍行列車と東上線乗り継いで保安隊第一管区総監部のある練馬駐屯地の門をくぐりました。その年の四月に新しく編制された第一管区音楽隊（現第一音楽隊）の補充要員八名の中で管打楽器の未経験者は私一人、控室で早くも愛用のメタルクラリネット（皆さん、見たことありますか？）を取り出して何やら音階らしきものを吹いているSさん、スティックで膝頭をたたいているU君、トロンボーンを経験を得々と披露しているUさん、そんな中で何もできずただ黙って眺めている私に声を掛けてくれたのがK君でした。彼は、今も歌っている初代コロンビアローズ（東京のバスガールで

有名がデビュー前の専属バンドでテナーサクスを吹いていた男で、「お前何の楽器をやりたいんだ？」学校の音楽室に貼ってあった楽器の絵を思い出しながら「うん、フルートかなあ。」「フルートはもう居るらしいぞ」などと話すうちにすっかり意気投合、「この人を頼りにしよう」と思ったのです。

いよいよ、新入隊員に対する隊長の訓示に続いて担当楽器の割り当てと楽器の授与の段となりました。颯爽と入ってきたのは、男前で姿勢が惚れ惚れするほど美しい石川隊長（後の第二北部方面音楽隊長）です。短い訓示の後、隊長は黒板に楽器名を書きました。

クラム、テナー、コルネット
アルトX2、トロンボーン、ドラム

隣に座っていたK君が囁きました。「やっぱりフルートはない、俺はテナーを希望するからお前はアルトにしるよ。」もう皆さんお判りですね。そうです、K君はアルトをアルトサククスと勘違いしたのです。何も解らない私は「アルトの希望者」の隊長の声に勢いよく「ハイッ！」と手を挙げました。

その直後の楽器授与式でうやうやしく戴いたのは、初めて見るチェコスロヴァキア製のアルトホーンでした。「俺の勘違いで悪かったな」とK君は言ってくれましたが全ては後の祭り、一ヶ月の特別訓練を終ると先輩たちと一緒に演奏に

参加しなければならぬスケジュールが待っている状況では、好き嫌いを言っているひまありません。次の日から文字通り血の滲むような（木当にしようちゅう唇から血が出ていました）練習がはじまったのです。（以下略）

編者長の

シニア徒然草



(二) 継続は力なり

毎月第三日曜日の午後一時から三時まで、「札幌SPレコード倶楽部」という音楽愛好家のグループが、恵庭市内のとあるレストランを借り切ってSPレコード

(SPレコード Standard Playの略)

十九世紀末から昭和三十八年頃まで生産されていた、一分間七八回転で再生し、収録時間が三〜四分程度のレコード)の鑑賞会を行っています。内容はおおむね歌謡曲、ジャズ等、クラシックの順で、ジャンルごとの解説者が曲や演奏者にまつわるエピソードを交えて進行します。参加費は無料(コピー代が五百円)で、毎回二十人前後の愛好家が集まります。SPレコードといいますが、レトロなイメージがあつたり、再生する時に発生するノイズが耳障りなどといった先入観がありがちですが、整備の行き届いた蓄音機(SPレコードのための再生装置)と状態の良い盤を使用すれば、現代のオーディオにまさるとも劣らない臨場感あふれる音質

で再生することができます。SPレコードには、優に半世紀以上に活躍した演奏家の「生きていた証し」が刻まれていることになるわけです。

さて、平成八年五月より毎月一回地道に続けてきたこの鑑賞会が、ついに百回目を迎えました。その記念すべき会は通常の日程を変更し、去る八月十四日(土)の午後七時からスタートし、午前零時近くにまで及ぶ長丁場となりました。最近やや足が遠のいていた方も含め三十五人が集まり、歌謡曲・ジャズ・クラシックの順でそれぞれ六〜七曲を鑑賞し、それを二回にわたり繰り返しました。歌謡曲は、昭和三年から十七年までの歌を年代順に二〜三曲ずつ紹介。日本を代表するテノールとして一世を風靡した藤原義江が歌う「波浮の港」、古賀メロディとは切っても切れない藤山一郎が歌う「酒は涙か溜息か」、村田英雄が歌う「人生劇場」などです。戦後編は、参加者からリクエストを募り四曲紹介しました。その中で、SP末期に近づく昭和三十三年に発売された村田英雄が歌う「無法松の一生」は、現在では「度胸千両」入りの方が知られていますが、発売当初は両者が別の曲として収録されていて、「度胸千両」はB面に収められ、曲中で重要な役割を果たす太鼓は三船敏郎が叩いていたそうです。

ジャズ等はデューク・エリントン、ル

イ・アームストロング、ベニー・グッドマン、エディット・ピアフなどでした。ここの聴きものは、バラフィン紙に包まれて未開封のナット・キング・コール・トリオのレコードをその場で開封し、針を通すというものでした。その音には、何度か針を通した盤にはないみずみずしさがあつたように思います。クラシックは、テノールのカール・ソーンやソプラノのメルバの名唱、「むすんでひらいて」や「蝶々」などの唱歌や、ブラームスの盟友でもあつたヴァイオリニストのヨアヒムなど、音源によっては今から百年余り前に録音されたものもあり、これらを一度に堪能できたのは得難い体験でした。

さて、標題の言葉は、まさに「札幌SPレコード倶楽部」の地道な取り組みが結実した百回目の鑑賞会の盛大さと、活動を支えてきた中心メンバーとそこに集う聴き手の音楽に対する深く熱い思いに由来しています。私にとっても、SPレコードを聴くことは単に古き良き時代を懐かしむのではなく、人類の文化遺産に触れる貴重な機会とと考えています。十一回目の定期演奏会を終えた私たち北海道シニア吹奏楽団もまた、これまでに積み重ねてきた活動の「継続」が新たな「力」を生み出し、団員の音楽に対する深く熱い思いを原動力としてさらに発展していくことを願わずにはられません。

※このコラムは不定期に掲載します。

親睦会のお知らせ

毎月恒例の呑み会です。皆さんとの親睦を図りたいと考えておりますので、どうぞお気軽にご参加ください!

- ・ 詳細は幹事よりお知らせします。
- ・ 参加申し込み、問い合わせは幹事までどうぞ。

★今後の担当幹事★

1/15(土)～新年会: 高橋さん
2月～近藤 3月～久光さん



コーヒータイムを

楽しんでみませんか?

今年度より、企画委員会からの提案で練習の合間の休憩時間を拡大し、「コーヒータイム」が始まりました。定期演奏会のプログラムでも紹介済みではありますが、シニアの新たな特色として、ここにあらためて紹介させていただきます。
サービスは各パート持ち回りの当番制で、毎月の親睦会になかなか参加できない方をはじめ、団員同士の交流の機会と

して好評のようです。休憩の間も楽譜をさらいたい、と思われる方もおられようとは思いますが、たまには少し楽器を吹く手を休めて、当番パートのそれぞれに個性豊かなサービスを楽しみながらいろいろな話に花を咲かせてみてはいかがでしょうか。

川柳

気配りと

笑顔絶やさぬ

シニアかな

一生

楽しみを

忘れたくない

シニアかな

一生

技もあり

らしきも忘れぬ

シニアかな

一生

※ 『世志多 一生』さん久々の川柳コーナーです。十月親睦会の案内文に掲載されたものを、作者了解のもとに再掲させていただきました。

♪こちら編集部♪

シニア便の編集部では毎回匿名の回員の方に登場していただくつもりでおります。回に関する「と、音楽に関する」と、音楽以外の趣味のこと、身近なこと、好きな食べ物、ペットのこと、私のおススメの店、最近の掘り出し物、川柳、クイズ、売ります・買います、為になる話、面白い話などいろいろでも結構です。なるべく回員全員の方に回るよう、原稿のお願いをするようになりますが、ご協力をよろしくお願いいたします。



《編集後記》

定期演奏会が終わり、ホッとするとともに、日々寒さが募る今日この頃、何やら一抹の寂しさも感じております。皆さんはいかがお過ごしですか?
亡き佐藤さんが以前、私にシニア便りのことを話して下さったときに、どんなことでもいいから自分の思うことを「徒然草」として原稿に書いてほしい、と話していたことを思い出しました。そこで、不定期のコラムを始めました。その折々に思いついたことを、思いついたときに書き留めていくつもりです。
最近の世相を見ておりますと、災害や事件などが多発し、ともすれば心が暗くなってしまうようですが、シニアには祝福すべき朗報が! 池内さんご夫妻、結婚おめでとうございます。新婚早々に海外での生活を始めるとのこと、何かと困難もあろうかと思いますが、二人で力を合わせ、暖かい家庭を築いてください。応援しています。

(編首長)